



ライティング支援連続セミナー体験記

知識と言葉をめぐる冒険「事実？意見？」

セミナー講師：野村 港二先生（教育イニシアチブ機構）

前号に引き続き、野村先生の Lesson2 の
レポートをお届けします！

Lesson2 『事実』と『意見』を区別する(2013/07/11(木) 15:30-16:30)

中央図書館ラーニング・アドバイザー 松原 悠(人間総合科学研究科)

今回のセミナーでは、「**事実**」とは何か、「**意見**」とは何か、その**両者の違いは何か**について、具体的な例に触れながら理解を深めました。

例えば、細胞を培養した際の、培養日数ごとの細胞数(相対値)の推移を示すグラフに対する2種類の記述に触れました。ある記述は、「6日目以降は、細胞数は変化しない」。またある記述は、「6日目以降に細胞数が変化しないのは、酸素が不足しているからだ」。前者は事実で、後者は意見ですね。ある記述は、「細胞数は相対値で示されている」。またある記述は、「細胞数が相対値で示されているのは、何か不都合な事実を隠すために違いない」。これも、前者は事実で、後者は意見ですね。

違う記述にも触れました。「ある日のつくば市の最高気温は35℃であった」。「その日は暑かった」。前者は事実で、後者は意見です。

野村先生はこうおっしゃいました。「**事実は、『あなたが気づいても気づかなくても、そこにある物事だが、言葉にできた物』。意見は、『あなたの感性が動くことで、あなたの気持をこめて言葉などで表現した何か』**」。筆者が言い換えるなら、**事実とは、誰にとっても必ず同様に観測される情報なのであり、意見とは、事実が誰かの意思によって解釈されたもの**なのでしょう。

また野村先生は、「事実と意見を区別して記述することが、レポートや論文を書くときに大切である」とおっしゃいました。調査や実験などで得られた事実から、どれだけ新しい価値を見出し、意見することができるか。レポートや論文における一つの目標がそこにあるからこそ、まずは事実と意見を区別して意識し、記述することが大切なのです。

ここからは発展的なレポートをしたいと思います。今回のセミナーのある場面で、野村先生はこんな問いを投げかけました。「デジカメで撮影された写真の情報は、事実なのか、事実ではないのか」。野村先生は「グレー」と答え、その理由として、「写真は、事実(である風景)をデジカメが処理してできたものなので、事実をそのまま写したものとは言えない」とおっしゃいました。

これは、そう単純には解けない、哲学的な問題です。確かにデジカメは、事実のある性質を切り取って観測する道具です。アナログなものをデジタルに変換しているのだから、写真は事実そのものではありません。しかし、デジカメを使えば、事実のある性質を、誰もが、必ず、同様に、観測することができます。写真には、「**事実が、ある性質をもっている**」という「**事実**」が現れていると言えるのではないのでしょうか。

もしデジカメで撮影された写真を「**事実ではない**」とするのなら、**事実とは何でしょうか**。「35℃である」「3秒である」といった記述も、温度計や、ストップウォッチといった道具によって、事実のある性質を切り取って観測した情報です。さらに言えば、「**緑に見える**」、「**そこに物が在る**」といった記述も、人間の感覚という道具によって、事実のある性質を切り取って観測した情報だと言わなければならなくなります。そこまで疑わなければならぬとしたら、果たして**事実とは何でしょうか**。

しかし、さしあたり**私たちがレポートや論文で求められるのは、「事実を、誰もが、必ず、同様に、観測できる」という「再現性」**です。デジカメも、そこに物が在るという人間の触覚も、レポートや論文においては、**事実を観測する道具として認められるべき**でしょう。

NEXT!

→逸村先生の回(18日)のレポートをお届け！

